

# 27AB-pm426

OTC 医薬品におけるイノベーション—スイッチ成分の技術推移解析—

○志村 美奈<sup>1</sup>, 宮台 信男<sup>1</sup>, 岡田 実<sup>1</sup>, 川瀬 一朗<sup>1</sup> (<sup>1</sup>エスエス製薬)

【目的】医療用医薬品における製品開発とは、薬として効果のある物質を探し出す基礎研究にはじまり、非臨床、臨床試験などを経て承認を得、販売に至るのが一般的である。一方、OTC 医薬品（一般用医薬品）の新製品開発は、既に有効性と安全性が明確になった医薬品成分の選択にはじまり、消費者の安全性と利便性を考慮して別の成分を配合したり、剤形を工夫したりすることに重点が置かれている。今回我々は、OTC 医薬品のうち、特にスイッチ成分を利用した製品におけるイノベーション推移の視覚化を試みた。

【方法】分析対象として、いずれもスイッチ成分であるイブプロフェン、ロキソプロフェンに着目した。分析手法として、一般的な科学技術指標の一つである特許出願件数データを利用し、パテントマップを作成することで OTC 医薬品のイノベーションの解析を行った。

【結果】イブプロフェンにおいては、風邪薬としての配合剤発売を機に、様々な配合剤関連の特許出願数が増加することが観察された。しかし出願数は減少の推移をたどっており、OTC 医薬品の開発対象としては成熟した成分であることがうかがえた。一方ロキソプロフェンでは、スイッチ化リスト掲載を機に出願数が著しく増加し、多種多様にわたる配合剤関連の出願から、近年では製品そのものに工夫を凝らした出願も多く見られた。出願数はいまだに増加傾向にあり、OTC 医薬品開発におけるイノベーションの開始段階にあつて、開発対象として非常に注目されている成分であることが推測された。

【考察】OTC 医薬品の製品開発は、より細かな消費者ニーズに応えるように進むことが、特許情報を指標とした分析で明らかになった。